山陽論叢　第 26 巻（2019）

論文

「命なりけり」の歌の系譜

佐藤雅代[1)]

キーワード：歌ことば、命、いのちなりけり、万葉集、八代集、十三代集、中古の和歌、中世の和歌、源氏物語

はじめに

西行の代表歌に次の一首がある。

あづまのかたにまかりけるに、よみ侍りける
としたけて又こゆべしとおもひきや命なりけりさやの中[(1)]
『新古今集』巻一〇・羇旅・九八七・西行

この歌は、西行が六十九歳の時、二度目の陸奥への旅に赴いた途上、遠江国佐野郡日坂の峠、小夜中山を越えながら詠んだとされている。『西行法師家集』の詞書には、「あづまのかたへ、あひしりたりける人のもとへまかりけるに、さやの中山見しことの昔に成たりける、思出られて」とみえ、詠歌事情も明らかである。

本歌、あるいは参考歌として、古くから次の歌が指摘されている。

題しらず
春ごとに花のさかりはありなめどあひ見む事はいのちなりけり
『古今集』巻二・春下・九七・よみ人しらず

しかしながら、西行の歌と『古今集』よみ人しらずの歌に詠まれた「いのちなりけり」は、同じ和歌表現でありながら、異なる表現世界を背景として成立しているのではないだろうか。それぞれの歌が内包する世界を「いのちなりけり」の歌の系譜を辿ることで明らかにしたい[(2)]。

一、万葉集の「いのち」

『万葉集』で「いのち」は、「伊乃知」「伊能知」「命」「寿」などと表記されている。「いのち」の「い」は息に通じ、「ち」は勢いを宿す霊格を示す言葉で、息は魂、つまり生命力の活動を意味する。「息の緒」が命と同義であるように、息は魂の視覚化された姿でもあった。『万葉集』には、「いのち」を導く枕詞として「たまきはる」と

1) 山陽学園大学総合人間学部　言語文化学科

いう言葉がみえる。「たま」は魂の意であるが、「きはる」の表記は「刻」「尅」「切」の字が用いられており、魂の霊力、生命力が徐々に減衰していく状態を表している[3]。『万葉集』に「いのち」の語を詠み込んだ歌は七八首あるが、そのうち、作者の知られる最も古い例は、次の一首である。

天の原振り放け見れば大君の御寿（みいのち）は長く天足らしたり[4]
『万葉集』巻二・一四七

この歌は、天智天皇が重篤の時、倭大后によって詠まれており、青木生子氏の指摘によれば「死の予感を契機にして、『いのち』による切実な祈念と確信とを堂々と歌い上げている[5]」という。つまり、「御寿は長く天足らしたり」は、天皇の生命力が見渡す限り、天空に満ち満ちており、魂の活発な動きを賛美しているのである。

一方、人間を死ぬべきものとして捉えると、「いのち」は次のように歌われる。

留め得ぬ命にしあればしきたへの家ゆは出でて雲隠りにき
『万葉集』巻三・四六一

水沫なすもろき命も栲縄の千尋にもがなと願ひ暮らしつ
『万葉集』巻五・九〇二

水の上に数書くごとき我が命妹に逢はむとうけひつるかも
『万葉集』巻一一・二四三三

「留め得ぬ命」は挽歌として詠まれており、「水沫なすもろき命」は老いと病苦の歌であるが、「水の上に数書くごとき」とした表現からは「命」を無常のものとして捉えていることが知られよう。他方、「いのち」は神が与えてくれたものとする意識が現れているのが次の歌である。

ちはやぶる神の持たせる命をば誰がためにか長くも欲りせむ
『万葉集』巻一一・二四一六

また、「いのち」は人知を超えた不可思議な何ものかによって支配されているという意識がみられる歌もある。

たまきはる命は知らず松が枝を結ぶ心は長くとそ思ふ
『万葉集』巻六・一〇四三

『万葉集』において、「いのち」の語を詠み込んだ歌七八首を部立て別にみると、挽歌は四首に過ぎず、相聞歌は四〇首を数えることから、「いのち」が相聞的情調をかきたてる「歌ことば」として機能していたことは言うまでもない。このことは、「死ぬ」という言葉が挽歌ではなく、相聞歌に頻出することと無関係ではないだろう。

君が家に我が住坂の家道をも我は忘れじ命死なずは
『万葉集』巻四・五〇四

朝霧の凡に相見し人故に命死ぬべく恋ひ渡るかも
『万葉集』巻四・五九九

直に逢ひて見てばのみこそたまきはる命に向かふ我が恋止まめ
『万葉集』巻四・六七八

恋死なむ後は何せむ我が命生ける日にこそ見まく欲りすれ
『万葉集』巻一一・二五九二

何せむに命継ぎけむ我妹子に恋せぬ先に死なましものを
『万葉集』巻一一・二三七七

あらたまの年の緒長くかく恋ひばまこと我が命全からめやも
『万葉集』巻一二・二八九一

「命死なずは」「命死ぬべく」のように「死ぬ」を伴った表現や、「命に向かふ」といった表現は、命がけの恋を表現する常套句である。相聞歌に死が詠み込まれることは少なくないが、「何にせむ命継ぎけむ」とは、生きていても仕方がない、という意味である。「我が命全からめやも」は、恋のために身も心も消耗しきっていることを表現している。これらの例歌には、非日常的な恋が強調されており、相聞歌の「いのち」には、恋の情念が封じ込められているといえよう。

二、八代集の「いのちなりけり」

八代集において「いのち」の語を詠み込んだ歌の数と、「いのちなりけり」の句を含む歌の数を示すと【表一】のようになる。句の数は、「いのちなりける」「いのちなりけれ」も含んでいる。以下、「いのちなりけり」の句として説明する際には、すべて同様に扱う。

八代集で「いのち」の語を詠み込んだ歌は、一三三首であるのに対し、「いのちなりけり」の句を詠み込んだ歌は、八首に過ぎない。また、「いのち」の語を詠み込んだ歌は、『古今集』一二首、『後撰集』一三首、『拾遺集』は二三首と、三代集では四八首に及ぶ。一方、「いのちなりけり」の句は、『古今集』に三首みえるものの、『後撰集』一首、『拾遺集』は例歌がみえず、三代集では四首にとどまる。また、『後拾遺集』には、「いのち」の語は二一首も詠まれているのに、「いのちなりけり」の句は一首もみえない。『金葉集』において「いのちなりけり」の句は、二度本に一首、三奏本に二首の計三首あるが、このうち一首は重複歌である。その重複歌を除き、『金葉集』三奏本の用例も加えた八代集の「いのちなりけり」の歌を以下に挙げる。

【表一】

歌集名	古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺集	金葉集(二度本)	詞花集	千載集	新古今集	計
語　数	12	13	23	21	9	4	22	29	133
句　数	3	1	なし	なし	1	なし	1	2	8

※金葉集（三奏本）では語数6、句数2となる

題しらず
春ごとに花のさかりはありなめどあひ見む事はいのちなりけり
『古今集』巻二・春下・九七・よみ人しらず

今ははや恋死なましをあひ見むとたのめし事ぞいのちなりける
『古今集』巻一二・恋二・六一三・清原深養父

やまひにわづらひ侍りける秋、心地のたのもしげなくおぼえければよみて人のもとにつかはしける
もみぢばを風にまかせて見るよりもはかなき物はいのちなりけり
『古今集』巻一六・哀傷・八五九・大江千里

つくしへまかるとて、きよいこの命婦におくりける
年をへてあひみる人の別には惜しき物こそいのちなりけれ
後撰集』巻一九・離別・一三三二・小野好古

顕季卿家にて恋歌人人よみけるによめる
あふと見てうつつのかひはなけれどもはかなき夢ぞいのちなりける(6)
『金葉集』二度本・巻七・恋上・三五四・藤原顕輔

題不知
さりともと思ふ心にはかされて死なれぬものはいのちなりけり(7)
『金葉集』三奏本・巻八・恋下・四六二・大中臣能宣

題不知
まどろみてさてもやみなばいかがせむ寝覚めぞあらぬ命なりける
『千載集』巻一七・雑中・一一四〇・西住法師

あづまのかたにまかりけるに、よみ侍りける
としたけて又こゆべしとおもひきや命なりけりさやの中山
『新古今集』巻一〇・羈旅・九八七・西行

五十首歌よみ侍りけるに、述懐の心を
ながらへて世に住むかひはなけれどもうきにかへたる命なりけり
『新古今集』巻一八・雑下・一七六八・守覚法親王

『古今集』九七番の歌は、花の盛りを再び見ることを擬人化して「あひ見む」と表現し、それが「いのちなりけり」であるとするが、これは天運によって支配される「命」そのものへの静かな詠嘆に他ならないであろう。六一三番の歌は、夫婦になろうと私を期待させたあなたの言葉が、「私の命そのものだ」と解釈できる。八五九番の歌は、病で心細くなった時に風に散る紅葉を見て、その情景よりもはかないものが、自分も含めた「人の命」であることに初めて気づいたとする。

『後撰集』一三三二番の歌は、「別れを惜しむ」という表現があるのを前提にして、自分の命は来年どうなるかわからない、惜しむものは「別れ」ではなく、「人間の寿命」だと詠んでいる。

『金葉集』（二度本）三五四番の歌は、現実に逢える効果はないが、恋しい人を夢に見ることが、生きる支えであったという感慨である。この歌は、『古今集』六一三番の歌に通じる世界を表現している。一方、『金葉集』（三奏本）四六二番の歌は、相手に期待する心のせいで、死ぬこともできない命であると詠んでおり、恋死にも

できない心の葛藤を覗かせる。

『千載集』一一四〇番の歌は、第二句「さてもやみなば」を「命が絶えたら」と解釈するか、「そのまま起きずに終わったら」と解釈するか二通りに分かれる[8]。「あらぬ命」とは、寝覚めの時に実感される「生命」そのものではないだろうか。

『新古今集』九八七番の歌は、「命なりけり」が末尾ではなく、第四句目に置かれているが、この「いのちなりけり」は、生かされていることへの強い感慨である[9]。一七六八番の歌は、つらいことと引き替えに生かされている命なのだ、という述懐になっている[10]。

八代集の「いのちなりけり」の歌は、九首のうち三首が恋の部立てに収められており、恋歌では、相手に期待する心が、我が命を支えていると詠んでいる。他の六首は、天運に支配される命、命のはかなさ、人間の寿命、生きて存在すること、存命の実感、辛さに耐える命を詠んでいる。

三、中古和歌の「いのちなりけり」

平安中期の類題歌集に『古今和歌六帖』があり、成立は十世紀の終わり近くといわれている。先の『古今集』九七番の歌は第二句が「花のにほひは」で、六一三番の歌はそのままの形で収められている。『古今集』や『古今和歌六帖』に「いのちなりけり」の例歌がみえることから、和歌表現として認知され、享受されていたとみてよいだろう。しかし、『拾遺集』『後拾遺集』には例歌がなく、中古の私家集において、どのように詠まれているかを確認しておく必要がある。ここで問題となってくるのは、「中古」の定義である。かつて橋本不美男氏は、中世和歌への包括性から「中古」の下限を歌林苑の成立頃、一一五六年～一一五八年とした[11]。この指摘を参考に『新編国歌大観』で、「中古」に分類される私家集を調べてみる。

調査の対象とした一〇八の私家集において、「いのち」の語が詠み込まれた総数は二四五首である。これに対し「いのちなりけり」の句は、以下の九首に過ぎない。

また

さりともとたのむふ心にはかられて死なれぬものはいのちなりけり
『能宣集』三一九

今ははや恋死なましをあひみむとたのめしことぞ命なりける
『深養父集』三九

たれならむ、ふぢの花を惜しまむといひしほどに、かくれにし人をこひて
惜しまむといひし花だに散らぬまになくなりにけるいのちなりけり
『安法法師集』四〇

きみをのみ恋ひつるあまのたまのをはさをにかかれる命なりけり
『賀茂保憲女集』一四三

見てだにもまどひし心わびぬればあはでもいのちなりけり
『賀茂保憲女集』一六八

かく恋ひばたへず死ぬべしよそに見し人こそおのが命なりけれ
『和泉式部正集』九二

露をみて草葉のうへと思ひしは時まつ程の命なりけり
『和泉式部正集』三〇四

七日、例ならぬここちのみすれば、けふやわがよの、とおぼゆる
いくべくもおもほえぬかな別れにし人の心ぞいのちなりける
『和泉式部続集』六二六

あふと見てうつつのかひはなけれどもはかなき夢ぞいのちなりける
『頼輔集』三二

『能宣集』の歌は『金葉集』三奏本に、『深養父集』の歌は『古今集』と『古今和歌六帖』にそれぞれ収められている。『賀茂保憲女集』一六八番の歌は、和歌本文に欠落があるものの、「いのちなりけり」が末尾に置かれることは変わらない。また、右の八首の例歌のうち、恋歌でないものは、『安法法師集』四〇番、『和泉式部正集』三〇四番の二首のみである。両首とも人間の命のはかなさを詠んでいる。

『安法法師集』の歌は、詞書きに「かくれにし人をこひて」とあり、藤の花が散るのを惜しんでいた人が、花が散る前に亡くなったことを悲しみ、命のはかなさを事実として確認したと嘆いている。

『和泉式部集正集』三〇四番の歌は、『和漢朗詠集』下巻「無常」の部に収められた羅維の作「観身岸額離根草、論命頭不繋舟」の詩句を訓読し[12]、その各音節を四三首の歌のはじめに順次、据えて詠んだ聯作のうちの一首で、草葉の露ほどのはかない命を詠んでいる。この歌は『続後拾遺集』哀傷、『万代集』雑五にも採られ、中世に享受されていた歌であることが知られる。また、『和泉式部続集』六二六番の歌は、死を自覚した時、かつて別れた恋人の愛こそ我が命の支えであったという感慨が「いのちなりける」で表現されている。これは、『和泉式部正集』九二番の歌と同様の発想によるものである。

中古の和歌に詠み込まれた「いのちなりけり」という詠嘆表現は、そのほとんどが恋歌である。これは、はかない命など恋の成就のためには惜しくない、あるいは逆に、恋しい人に逢うことを期待するから命が惜しくなる、といった発想によるものである。いずれにしても相手の存在がいかに大きなものであったかを、はっきりと自覚した時に発せられる心の叫びに他ならない。恋歌以外では、人の命の無常を意識した時の感慨として詠み込まれていた。

四、源氏物語の「いのちなりけり」

物語の和歌において「いのちなりけり」の句は、どのように詠み込まれているのだろうか。管見に入った最も早い例は『うつほ物語』である。

夏草に置く露よりもはかなきは君に懸かれる命なりけり
『うつほ物語』菊の宴[13]

この歌は、藤英からあて宮に贈られた恋歌で、夏草に置く露よりも命をはかないものとして詠んでいる。『うつほ物語』に見える「いのちなりけり」の例歌は、この一首のみである。次に用例がみえるのは、『源氏物語』である。

「いのち」の語は『源氏物語』に一二二例あり、「命長く」「命のかぎり」「命だに」「命絶え」「命延ぶ」などの用例が散見する。また、『源氏物語』では七九五首の和歌が詠まれているが、そのうち「いのちなりけり」の例歌は二首のみである。物語の始発を開示するともいうべき最初の一首は、桐壺更衣によって詠まれている。以下、その場面を確認しておきたい。

輦車の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひてさらにえゆるさせたまはず。「限りあらむ道にも後れ先立たじと契らせたまひけるを、さりともうち棄ててはえ行きやらじ」とのたまはするを、女もいといみじと見たてまつりて、

「かぎりとて別るる道の悲しきにいかまほしきはいのちなりけり

いとかく思ひたまへましかば」と、息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを御覧じはてむと思しめすに、「今日はじむべき祈祷ども、さるべき人々うけたまはれる、今宵より」と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながらまかでさせたまふ。

桐壺巻[14]

桐壺帝の寵愛を一身に受けていた更衣であったが、病を得て死期が迫り、宮中からいよいよ退出しなければならない時がきた。帝はその現実をなかなか受け入れられないで狼狽し、重篤な状態の更衣を、なおそば近くに留めおこうとする。しかし、衰弱しきった娘を気遣う更衣の母の懇願によって、ようやく退出が叶うことになった場面である。

帝と更衣という公の身分ゆえに悲恋とならざるを得なかった二人が、更衣の最期の場面で、一人の男と一人の女として向き合い、私情を貫く形で更衣の側から詠まれたのが「かぎりとて」の歌である[15]。帝は悲しみのあまり返歌もできず、そのことがこの場面における帝の惑乱ぶりを強調している。更衣の死後、その死を悼んで帝が詠んだ「たづねゆくまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく」が遠く呼応しているとも言われるが、一般的な唱和の形ではない。

『源氏物語』で詠まれたもう一首の用例は、宇治十帖の物語世界で、匂宮と浮舟の贈答歌にみえる。

長き世を頼めてもなほかなしきはただ明日知らぬ命なりけり

浮舟巻・匂宮

心をばなげかざらまし命のみさだめなき世と思はましかば

浮舟巻・浮舟

匂宮の歌は、行く末を長くと約束しても、やはり悲しいのは、明日のことさえ分からない人の命のはかなさであるよと詠み、それに対する浮舟の辺歌は、この世で不定なのが命だけなら、人の心の定めさなを嘆かないのにと応じている。匂宮と浮舟の贈答歌は、先に見た中古の私家集の表現世界に共通するものであり、恋歌の伝統的な枠組みを越えるものではない。

けれども、桐壺更衣の歌は、以前からの帝の約束である「限りあらむ道にもおくれ先立たじ」と、この場面での「うち捨ててはえ行きやらじ」という帝の言葉を受けて詠まれている。「生かまほしき」

と「行かまほしき」を掛け、この世を去る更衣の意志のすべてが、この歌に凝縮されているといっても過言ではない。桐壺帝への確かな愛を伝えようとし、そこに自分の生きる道があったのだと気づく、更衣の心情が結句の「いのちなりけり」に込められている。これは、従来の和歌表現の枠組みを越える発想によって詠まれた一首であるといえる。(16)

五、中世和歌の「いのちなりけり」

中世和歌における「いのちなりけり」を考察するにあたり、冒頭に掲げた西行と同じ、いわゆる新古今時代(17)に活躍した歌人たちの私家集と、『新古今集』より後に成立した勅撰集について調査してみる。

まず、調査の対象とした私家集二九のうち、「いのち」の語を詠み込んだ歌の総数は一七五首、「いのちなりけり」の句を含む歌の総数は一三首であった。西行の家集に注目すると、「いのち」の語を詠み込んだ例歌は、『山家集』一八首、『西行法師集』六首、『聞書集』三首、合わせて二七首見えるものの、「いのちなりけり」の句は、『西行法師集』に一首のみである。しかも、この一首は『新古今集』に採られている。西行以外の家集で「いのちなりけり」の句は、良経の『秋篠月清集』一首、慈円の『拾玉集』三首、家隆の『壬二集』四首、定家の『拾遺愚草』一首、『小侍従集』一首、『長方集』一首、『隆信集』一首見える。

一方、『新古今集』成立後の勅撰集、『新勅撰集』から『新続古今集』までの十三代集において、「いのち」の語を詠み込んだ歌の総数は四四三首で、「いのちなりけり」の句を含む歌は三五首である。この三五首を部立て別に見ると、「恋」が二三首を占めている。

遇不遇恋
むばたまのよるの契りはたえにしを夢路にかかるいのちなりけり
『秋篠月清集』四七二

花五十首
山ざくら思ふあまりに世にふれば花こそ人の命なりけり
『拾玉集』一三一六

春七首
かぎりなくあひみん春は桜花神のまもれる命なりけり
『壬二集』一九六〇

恋廿五首寄名所
たのめおきし後瀬の山のひとことや恋をいのりの命なりける
『拾遺愚草』一一六五

花歌の中に
ながらへて八十の春にあふ事は花みよとての命なりけれり
『続拾遺集』巻七・雑春・五〇二・京月法師

題しらず
生きてこそ今年も見つれ山桜花に惜しきはいのちなりけり
『続千載集』巻二・春下・一一六・平宣時

新古今時代の私家集『拾玉集』『壬二集』や、それ以降に成立した勅撰集『続拾遺集』『続千載集』の中に散見する歌は、いずれも

冒頭に掲げた『古今集』の「春ごとに花のさかりはありなめどあひ見む事はいのちなりけり」が念頭にあっての詠歌だろう。『秋篠月清集』と『拾遺愚草』の例歌は、題詠によって詠まれた恋歌である。良経は「夜の契りが絶え、夢で逢うことが生きる支えである」と詠み、定家は「後日また逢うことを期待させた相手の一言が恋の成就を願う自分の生きる支えである」と詠んでいる。また、定家の歌は、『古今集』の「今ははや恋死なましをあひみむとたのめしことぞ命なりける」を本歌とする。

中世和歌の「いのちなりけり」は、西行の詠歌を除けば、『古今集』を本歌としたものや、本歌ではないまでも『古今集』の表現世界を背景に、その枠組みの中で詠まれている。「いのちなりけり」という詠嘆表現に中世的な新しさはみられない。

結び

『万葉集』において、「いのち」という語は多く詠み込まれているが、「いのちなりけり」という詠嘆表現はみられない。勅撰集において、「いのち」の語を詠み込んだ歌の総数に対し、「いのちなりけり」の句を含む歌の総数は、圧倒的に少ない。これは、中古・中世の私家集でも同様である。内容的には、人の死を悼む挽歌や哀傷歌よりも、恋歌の中で詠まれることが多い。さらに、「いのちなりけり」の句は、和歌の末尾表現として第五句目に置かれることがほとんどである。物語の和歌において、「いのちなりけり」の句が詠み込まれることは少なく、『うつほ物語』『源氏物語』にわずかに用例がみえるに過ぎない。

「いのち」は、「魂」つまり「生命力」という意を表すことから転じて、寿命を意味するようになる。さらには、命が人知を超えた不可思議な何ものかによって支配されているという意識も生じてくる。「なりけり」という表現は、今初めてその事実に気づいたという詠嘆であるが、和歌の中で「いのちなりけり」と表現される時、詠者は「命」の何に初めて気づいたというのであろうか。命は死によって完結し、死は免れえぬ定めであり、露のようにはかなく無常であること、命の不如意さへの気づきなどが「いのちなりけり」と詠嘆で表現されている。長寿への自覚が「いのちなりけり」と詠まれることはないが、自然の摂理の中で生かされているという意識は詠み込まれている。また、恋の成就のためには命など惜しくないと詠み、あるいは逆に、頼みにならない相手に期待し、それを支えとしてしまうことから、命を惜しむ心を「いのちなりけり」と詠んでいる。

冒頭に掲げた西行の歌は、第四句目に「いのちなりけり」が置かれ、「さやのなか山」と体言止めになっている。西行が気づいた「命」とは、生きて今ここにあることの実感であり、生かされていることへの感謝、存命の喜びとでもいうべきものであろう。その意味で、西行の「命なりけり」は他の例歌と一線を画している。また、『源氏物語』において桐壺更衣が詠んだ歌も特異である。死期の迫る更衣が、生への執着を「いのちなりけり」と詠嘆しているのであるが、この生への執着は、桐壺帝への愛に他ならない。西行の歌も桐壺更衣の歌も「命」と向き合う時、死よりも生を見据え、意識するところから詠まれていたことは注意されてよい。物語文学という虚構の世界で登場人物が詠んだ和歌と、乱世を生きた実在の人物が詠んだ和歌、いずれも従来の和歌表現の枠組みを越えたところで詠まれ、独自の表現世界を形成していたのである。

注

（1）和歌の引用は、特に断らない限り『新編国歌大観』（角川書店）により、歌番号も同書によるが、一部、表記を私に改めた。

（2）筆者はかつて、和歌文学大系五四巻『中古歌仙集（一）』二〇〇六年一〇月の付録「月報二四」で、『命なりけり』の歌をめぐって」と題して考察したことがあり、本稿はそれを発展させた論考である。

（3）『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年）

（4）『万葉集』の引用は、新編日本古典文学全集『萬葉集』（小学館）により、歌番号は旧番号で示した。

（5）『青木生子著作集 第四巻 萬葉挽歌論』（おうふう、一九九八年）

（6）『金葉集』三奏本・三七一に同じ歌がみえる。

（7）第三句「はかされて」は、「はかられて」の誤写とも考えられるが、『玉葉集』一五三八には、「恋の歌の中に」能宣朝臣として同じ形でみえ、「ばかされて」とすれば「だまされて」と解釈できる。

（8）新日本古典文学大系『千載和歌集』（岩波書店）は、正念の状態で臨終を迎えられない恐れを詠んだとし、和泉古典叢書『千載和歌集』（和泉書院）は、寝つかれないまま物思いをしている時こそ、命のほかの命ともいうべき貴重なものだ、と解釈する。

（9）西行の「命なりけり」については、浜千代清「『いのちなりけり』私解」『女子大国文』九四号（京都女子大学）一九八三年一二月、大野順一「西行の出家―命なりけり考―」『文学』五四巻一〇号（岩波書店）一九八六年十月、野毛孝彦「老いの実存・西行『命なりけり』」『短歌』四〇巻一一号（角川書店）一九九三年一一月、高木周「西行の『命なりけり』の歌と鎌倉期の日記の表現」『国語と国文学』九五巻一一号（東京大学国語国文学会）二〇一八年一一月などの論考がある。

（10）当該歌の「うきにかへたる命なりけり」という考え方は、『源氏物語』の「絵合巻」における光源氏の「中ごろなきになりて沈みたりし愁へにかはりて、今までもながらふるなり」という述懐などに通じるものがある。

（11）橋本不美男『院政期の歌壇史研究』（武蔵野書院、一九六六年）

（12）「みをくわんずればきしのひたひにねをはなれたるくさ、いのちをろんずればえのほとりにつながざるふね」

（13）『うつほ物語』の引用は、新編日本古典文学全集（小学館）による。

（14）『源氏物語』の引用は、新編日本古典文学全集（小学館）による。

（15）『岷江入楚』には、「或抄御説云」として「生死のならひ力をよはねとも生まほしきとねかいたる也」とみえる。「或抄」とは「長珊聞書」、「御説」とは三条西実条の講釈のことである。

（16）桐壺更衣の和歌については、藤河家利昭「桐壺巻の方法―『いかまほしきは命なりけり』の歌について―」論集中古文学1『源氏物語の表現と構造』（笠間書院、一九七九年）、のち『源氏物語の源泉受容の方法』（勉誠社、一九九五年）所収、植田恭代「限りあらん道にもおくれ先立たじ、と―反逆する愛のゆくえ」『国文学』臨時増刊号『テクストツアー源氏物語ファイル』（學燈社）二〇〇〇年七月、秋本宏徳「桐壺更衣の和歌」『成蹊国文』三四巻（成蹊大学）二〇〇一年三月、吉見健夫「桐壺更衣の和歌と長恨歌引用―源氏物語始発の形成」『日本古代文学と東アジア』（勉誠出版、二〇〇四年）所収、植田恭代「『源氏物語』と和歌のことば―桐壺更衣「いのちなりけり」の場合―」『跡見学園女子大学文学部紀要』四七号・二〇一二年三月の論文などがある。

（17）新古今時代の定義については、『千載集』の成立後から、藤原定家の没年までの間、建久元年（一一九〇）～仁治三年（一二四二）頃までとした。

付記　本研究は、山陽学園大学・短期大学の学内研究補助金（平成三十年度）を受けて追行された。